

報



會

會 岳 山 本 日

18

月 九 年 七 和 昭

水の力

冠 松次郎

谷歩きをして、何時も驚くのは水の力だ。あの高さからこの水底までこんな剛頑な岩石を、どうして彫り下げて来たかと、隆々たる峽壁を仰いだ私等は、水の力のすばらしさを讃嘆することは屢々ある。

柔軟な水が、小さな轉石に阻まれて、その周りを遠慮がちに迂つて行くやうな水の流れが、奔放、疾走、浸滲する處、巨大な岩石を押し流し遂には絶大な天斧となつて堅岩を割り、深谷を刻むのだ。

その雄大な彫塑の痕を見て歩く、私等谷を渉る者は、高大な自然の畫廟に、幾百世紀を経た超人の傑作を觀賞しながら行くのだから、その樂みはユニツクである。

青磁の瓶や樂燒の壺、その逸品の肌を撫で、色を眺めて恍惚たる好事家の樂みよりも、對象が大きいただけ豪快壯美を極めてゐる。實際よい谷を歩いたときの思ひ出ほど、深い印象を私の脳裡に焼きつけるものはない。

それだから、これ等優秀な溪谷の風致が、人工により慘害されて行くことを思ふと、名工の稀品が心なく破損されるよりも、悲しみは強いものだ。

水の力。その彫塑の技巧を最も強く感ずるのは、矢張り堅岩によつて圍まれた峽谷に於てであらう。

黒部のやうに本流の浸蝕力が迅速な谷では、支谷の落口は、勢ひ瀑布となつて落下しなければならぬ。そこに懸谷を形造るのであつて、廊下の到る處に私等は、その美觀を見らる。

そしてこれ等支谷の落口である瀑布は、時と共に後退しつゝある。堅壁を削蝕、浸蝕して後退する水の力は、必然的に、その痕跡に深い洞門を穿つ。流れは窟のやうな岩の立極の奥を、瀑布となつて跳躍するの奇觀を呈する。

そしてかう云ふ支谷の落口に限つて、思ひ切り狭いものだ。堅岩は水に幅を與へず深さを與へるからだらう。流域數里を算する大支流の落口が、僅か三、四米突の岩隙を有するに過ぎないのも、多くはかう云ふ處だ。

私はつい先日、黒耀川柳又谷の源流地を歩いた。柳又谷は姉妹川の北又谷の靜的に沈んでゐるのに比して、その源流より下流まで、殆ど奔川の連續によつて成つてゐる。荒蕩たる男性的の谷だ。源流地に於て川床は激落して、瀧津瀬は瀧津瀬と相接して、一息の餘裕を與へない程である。その間に危うく雪橋は斷續して、谷を行く者をして非常の努力を強うる。この谷は源流地の白馬主峯と旭岳（前蓮華）との鞍部から、二時間程で、岩壁の露出が著しくなる。

私等が最初の雪橋の下りで、雪と岩壁とのギアアップを、一本の流木によつて僅かに越え、崖側を廻つて谷

に下りた時だ。先に行つた人夫は汀に下りるなり、對岸を見て佇んでしまつた。そしてあつ！と嘆聲を洩した。私もつゞいてそこまで下りて、鼻先を見て驚いた。岩の大衝立に隔てられて見ることも出来なかつた大きな谷が、然も狭い狭い岩の洞の奥から瀧となつて落下してゐるではないか、それは前蓮華と清水平と

の水を併せてくる大きな蓮華谷（或はショウツ谷）の落口だつた。上流から見たときに、すぐ先から明る大きな谷が下りてゐることは分つてゐたが、さてその落口に中々出ないので待遠しく思つてゐた。今谷へ下りて見ると、想像も出来ないやうな狭い洞から落ちてゐるのを見えて驚いた。まるで巾着の口のやうな谷だ。柳又谷はこの蓮華谷落口附近から壁は高く流れは狭くなる。それから緒い丸い肩骨は入り組んで果聲してゐるのだ。その邊からは雪橋がしつかりしてゐなければ通ること出来ない處だ。かう云ふやうな割れ谷、水に割りつけられて深く鋭い込んでゐる谷の標式的ものは、黒部の十字峽であらう。

日電の歩道を、鉾谷に架けられた吊橋を渡つて、簡単に通つただけでは、彼處の複雑な雄大な趣は、とても味はへるものではない。對岸の棒小屋澤の瀧場の中から鉾谷を顧み、その瀑布と釜との壯觀を眺め、飛瀧、深淵をつないで、ひた走りに押してくる黒部本流を迎へてこそ、眞に、十字峽の溪觀を知ることが出来るのである。

私等は黒部の下廊下についてのみでも、東谷落口附近、半月峽、十字峽、白瀧溪の峽壁の壯麗さを見ただけでも、この深谷に働く水の力の偉大さと、その彫啄の卓越せるのを嘆賞せずにはゐられない。彫刻をするのには先づ素材のよいものを選ばなければ駄目だ。水の彫刻に、黒部はどんなにふさはしい素材を提供したことだらう。

私は更にこの谷を埋めてゐる深林の美を考へ、峽谷を圍む高連山の姿をしのぶとき、水の美しい力、強い力は一層私等の心を魅了する。

谷から歸つたばかりで、もう次の溪行を考へ、僅かの月日の經つのをさへ待ち侘びて私は又谷へ潜入しやうとする、然しこれは山を無視してゐるのでは勿論ない。谷は山の一部分であると共に、山の持つ最も雄大な山壁の大部分は、水の力、谷の營力によつて形成されてゐるものであるから。

(昭和七、八、二五、稿)



會務報告

九月八日定例理事會

出席 小島 高野 高頭 武田 冠
茨木 松方 松本 角田 神谷
伊藤 田中

一、穂高唐澤に建設すべき山小屋は松本營林署より未だ正式許可來らざるも來次第實行にかゝる筈。
一、松方、伊藤兩理事より八月中に於ける圖書整理の報告あり。貸出制度に就ては目下研究中。
一、明年度理事候補者に付議したり。
一、財團法人の件、東京府を経て文部省へ廻付せる旨報告あり。

第五十六回小集會通知

来る九月二十八日(水曜日)午後六時半より赤坂溜池三會堂に於て開催左記の講演が御座います。可成多數御來會を希望致します。

「山と星の話」

「山の繪を描くに就て」

野尻抱影氏
茨木猪之吉氏
(司會者 茨木)

會員計報

長野縣 手塚順一郎氏(大正八年八月入會、會員番號六九一)
昭和七年七月三十日逝去せらる、本會は茲に謹で哀悼の意を表す。

圖書基金申込會員氏名

本誌第十七號に報告したる以後の申込者左の通りである。
秋田 藤島敏男(一口)追加分
某氏(一口)
前回發表の分を加算すれば現在三十七名、四十七口である。

新着圖書

今井徹郎著 山は生きる

木星社書院

山本一清著 登山者の天文學

恒星社

黒田正夫著 登山術

大村書店

住友山岳會編 近畿の山と谷

朋文堂

手塚順一郎著 山の寫眞のうつし方

朋文堂

伊豆震災地一、二等三角點復舊測量記事

陸地測量部

天神野基線測量報告

同部

箱根近傍圖五萬分一多色刷

同部

大峯山脈及大臺ヶ原山近傍圖

同部

五萬分一

同部

婦人之友 八月號

其社

山小屋 第九號

朋文堂

山と溪谷 第一五號

其社

登山とスキー 第八一—一〇號

アルビニズム社

ツリースト 第八號

同部

ジャパンツリーストビューロー

同部

神戸ヒヨコ登山會々報 七、八月號

同部

奈良みなかみ會々報 六、七、八月號

同部

關東山岳會々報 七月號

同部

日本登高會々報 八月號

同部

廣島山岳會々報 同

同部

東京山岳會々報 同

同部

東京山岳會々報 七月號

同部

藏前山岳部々報 八月號

同部

R.S.C.部報 八月號

同部

明峯山岳會月報 同

同部

田川山岳會々誌 第二號

同部

神戸アヌモ會々報 八月號

同部

臺灣山岳會 八月號

臺灣山岳會

ベテスツリヤン 七月號

關西徒步會

雪 八月號

東京アマチユアスキークラブ

山幸 十二號

阪神山岳會

白樺 第五輯

白樺山岳會

針葉樹 第六號

商大一橋山岳部

登歩溪流 第七號

東京登歩溪流會

朽綱 七月號

朽綱山岳會

岳友 同

日本岳友會

旅行 八月號

東京旅行クラブ

旅同 八月號

東京アルカウ會

山 八月號

横濱山岳會

ベルク 同

岡山山岳會

山行 同

筑紫山岳會

山の巡禮 第六卷

關東岳會

山行案内 八月號

昭和マウント俱樂部

アルカウ趣味 八月號

日本アルカウ會

アルカウ趣味 合本二冊

自大正十四年 至昭和六年

同部

同部

同部

同部

同部

同部

同部

同部

- Aug-Sept. 1932
Club Alpino Italiano Vol. LI
No. 5—6 Maggio-Giugno 1932
Trail and Tinturline No. 165/166
Jul-Aug. 1932
Sierra Club Bulletin Vol. XVII.
No. 3 Jun. 1932
Revue Alpine C. A. F. Vol. 33
No. 2 1932
Unione Ligure Escursionisti Anno
19 N. 7 Luglio 1932
Meddelingen der N. A. V. 1932
Natural History Vol. XXXII
No. 4 Jul./Aug. 1932
Die Alpen Les Alpes, Les Alpi
VIII-No. 8 Aug. 1932
- 會員寄贈圖書**
臺灣產高山蝶 第六
臺灣產哺乳類之分布及習性第一第二
以上 鹿野 忠雄氏
地震 第四卷六、七號
以上 木村 鎮吉氏
福岡縣體育協會編
北九州山岳一覽 全
以上 竹内 亮氏
松本唯一著 大阿蘇の新研究 全
日本地理大系海外發展地篇(下)
前田曙山著 高山植物叢書 第壹
以上 伊藤秀五郎氏
日本地理大系 臺灣篇
大島亮吉 山 研究と隨想
吉江喬松著 吉江喬松詩集
シヨン・パチラー著
アイヌ語より觀たる日本地名研究
一水會パンフレット 造園研究

- 長田秋濤著 ヒョラヤ山探險
矢澤米三郎著 白馬岳
科學畫報臨時増刊 山岳の驚異
同 昆蟲の驚異
同 スキー臨時増刊 登山とキャンパ
伊藤秀五郎著 風景を歩む(詩集)
柳田國男著 山の人生
福澤諭吉著 世界國畫 全五卷
改曆辨
同 杉山棟菴譯 地學事始 全三卷
加茂季鷹著 富士日記(文化十一年版)
帆足義兼譯 地形論 全四卷
以上 松方 三郎氏
北川淳一郎著 四國アルプス
以上 田中 正雄氏
Charles Gos :—
Propos D'un Alpiniste 1922
G. Mase :—
Book of the tree 1927
Giovanni Segantini's Schriften und
Briefe.
Giovanni Segantini und Das Segan-
tini Museum in St. Moritz.
Iulinger, Jos. f. :—
Fuerstlos Bergsteigen.
Bernhard :—
Giovanni Segantini Sein 25
Todestag 1925
Schroter, Ludwig :—
Taschenflora des Alpenwanderers
1926
Hofer, Erwin :—
Winterliches Bergsteigen Alpine
Schlaftechnik 1925
Mergenthaler, Hans :—

- Ihr Berge 1920
Hoek, Henry :—
Der Schi 1925
F. nberg, A. J. :—
Ruskins Modern Painters 1927
Egger, C. :—
Aignilles 1924
Flemwell, G. :—
Villars and its Environs (Beau-
tiful Switzerland) 1914
Rey, Guido :—
Das Matterhorn 1926
Brader, Dr.
Schneberger, Hans.
Sprang U. Langlauf 1926
Faneck, Arnold.
Schneider, Hanns.
Wunder d s Schneeschuhs 1925
Vol. 2
以上 松方 三郎氏
購入圖書
吉田十一著 日本旅行史(昭二)
田中阿歌磨著 趣味の湖沼學
(大、十一)
同 日本北アルプス
湖沼研究(昭、五)
田部重治著 日本アルプスと秩父巡
禮
(大、一〇)
中島吉太郎著 傳説の上州(昭、七)
植田孟緒著 日光山志
全五冊(天保八年)
西蔵研究會編 西蔵
(明、三七)
大橋乙羽著 千山萬水
(明、三三)
同 續千山萬水
(明、三三)
武田久吉著 高山植物
(大、六)

- 加藤咄堂著 旅から旅 (大、四)
一戸直藏外著 日本アルプス縦走記
(大、六)
國府岸東、平福百穂著
不二一周 (明、四〇)
大日本地誌大系 第三御府内備考三
第四 同 四
第七 新編武蔵國風土記稿 七
八 同 八
第九 同 九
九一七 山州名跡志 二
第二四 斐太後風土記 下
第二七 雲陽誌
第二八 三州地理志稿
第二九 御府内備考 五
第三〇 新編會津風土記 一
第三一 同 二
小諸小學校編 淺間山 (明、四三)
富士文庫第一卷(大、一五)
大和山岳會編 大和アルプス大臺ケ
原山 (大、一〇)
松浦厚著 富士山麓回湖記(大、五)
登山研究會編 富士と箱根(大、八)
川口孫治郎著 乗鞍嶽上十日記
(大、一〇)
石内爲次郎著 箱根八里 (大、二)
靜觀道人著 富岳志 (明、四一)
田中六藏編 靈峯富士 (昭、二)
歴史地理 富士山號 (大、九)
關東岳愛會 山の巡禮 自第二號
東京蝸牛會 三角點 至第五號
大阪商大旅行部 雪線 第一號
東京商科醫專山岳部 杖痕 第七號
選信山岳會々報 第一、三號
大箱根國立公園 第一、二號
(昭、五) 同

- F. S. Smythe :—
Kismet Conquered. Leader of the
Expedition, and author of "The
Kangchenjunga Adventure" 1932
Leptiney :—
Climbs on Mont Blanc 1930
Forbes :—
The Tour of Mont Blanc and of
Monte Rosa 1925
W. I. on :—
Mountain Climbing 1897
W. T. Palmer :—
The Art of Camping 1932
- 圖書紹介**

陸地測量部新刊地圖目錄
五萬分一地形圖 修正
日光 四號 矢板 一面
水戸 五號 太田 一面
十二號 高濱 一面
七號 木戸 一面
宇都宮 四號 水海道 一面
十號 桐生及足利 一面
十三號 沼田 一面
十二號 身延 一面
十六號 赤石嶽 一面

高山	五號	立山	一面	宇治山田十三號	名張	一面
同	六號	檜ヶ嶽	一面	和歌山	六號	五條
宇治山田十五號	大臺ヶ原山	一面	京都及大阪三號	京都東南部	一面	
同	十六號	尾鷲	一面	同	四號	奈良
京都及大阪二號	京都東北部	一面	同	七號	京都西南部	一面
同	六號	京都西北部	一面	富山	八號	黒部
田邊	一號	十津川	一面	長野	八號	十石峠
和歌山	二號	吉野山	一面	以上拾六面、七月三十日出版		
同	三號	山上ヶ嶽	一面	五萬分一地形圖		
同	四號	釋迦ヶ嶽	一面	大泊	九號	多蘭内
徳島	十號	草壁	一面	同	十號	雨龍
五萬分一地形圖	鐵道補入	一面	同	同	十三號	牛荷山
名寄	十五號	添牛内	一面	同	十四號	臥牛山
廣尾	九號	生花苗	一面	同	十五號	泥川
飯田	十號	加子母	一面	内幌	一號	内幌
和歌山	十號	岸和田	一面	同	二號	南名好
大分	十五號	阿蘇山	一面	同	三號	十和田
二十萬分一帝國圖	鐵道補入	一面	五萬分一地形圖	修正		
五萬分一朝鮮地形圖	修正	一面	札幌	六號	江別	一面
海州	七號	新院	一面	宇都宮	六號	栃木
春川	十三號	抱川	一面	同	十二號	熊谷
五萬分一山嶽圖(四色刷)			同	三號	谷村	一面
大峯山脈及大臺ヶ原山近傍			同	九號	八ヶ嶽	一面
以上貳拾九面、六月三十日出版			金澤	四號	白山	一面
五萬分一地形圖			名古屋	十六號	上野	一面
内幌	十五號	海馬島	一面	五萬分一朝鮮地形圖	修正	
五萬分一地形圖	修正	一面	京城	三號	京城	一面
豊原	八號	留多加	一面	同	九號	白川
佐倉	十四號	佐倉	一面	公州	九號	清州
宇都宮	二號	壬生	一面	以上拾八面、八月三十日出版		
同	三號	結城	一面	大阿蘇の新研究	松本唯一述	
同	十四號	前橋	一面	昭和七年二月	熊本地歴研究会發行	
名古屋	十五號	水口	一面	菊判一七〇頁	附圖四葉・價五〇錢	
長野	二號	棒名山	一面	本書は、九大教授松本唯一氏が、		
同	十二號	鑿料山	一面	地歴研究会主催の講習會に於て、初		

學者の爲になせる講演であるから、行文平易にして而も内容豊富、素人の私達にとつては、火山の一般的概念を得るに便であり、阿蘇火山研究に於ては、興味ある著者の新知見も述べられてある。内容は左の六章に分たる。

一、序説 二、火山學概説 三、日本の地帯構造概略 四、九州の火山地質概略 五、阿蘇火山 六、結尾。(伊藤秀五郎)

山は生ける 今井徹郎著

木星社書院發行・四六版 四〇二頁・定價一・五〇

『山は生ける』は著者の言葉の如く、古典日本の有つ俳諧的閑寂味と近代日本の抱く聰明の感情とを統一融和したところに生れる、渾然たる人生の殿堂をこの自然地に見出す可く溢れる歡喜を擁して、眞實の點描に精進した過去を記録を示すもので著者が如何に西甲州の山々に親み、且それなりのちとしてあるかが判る。本書で著者の最も力を入れたものは恐らく中村儀助の覺書の一篇であらう。木曾に生れ甲斐に生ける著者には打つてつけの好材料であり又よく整ふて書かれてある。次に山に入るといふ一篇も山に住む人の心持をよく我々に傳へて呉れる。この外山想篇、山の物語、山小屋外二篇を收め、誰が撮影したのか判らぬが、寫眞もその解説も亦伸々よく出来てゐる。(松井)

九州の山々 時間記録と費用概算 北田正三著 朋文堂發行 定價一圓二十錢 三六判二八〇頁 口繪寫眞七枚 スケッチ二十七個 概案圖九個挿入

加藤、岩崎兩氏の好著「九州山岳案内」昭和三年がすでに稀觀の部に入つた此頃九州山岳界の重鎮北田正三氏の手によつて「九州の山々」なる書が出版されると聞いた時は多大の期待をかけたものであつた。然し實物を手にして見ると前の期待を裏切つて頗る物足りない感がする。

勿論出版者側からの注文もいろいろとあつてあれ丈のものにまとめる著者の苦心も僅少ではなかつたであらうと推察は出来るが、今少し内容を引締めてもらひたかつた。そして冒頭に著者のオリヂナリチーをあれ丈高唱してある手前今少しオリヂナルと引用とのケヂメを明瞭にしてみらつて置いた方がチヨイチヨイ氣付くひどい獨斷から救はれたであらうし又文献としての重要性も増した筈である。挿入のスケッチも著者の自筆には違ひないであらうが、それぞれその場所から作つたものと斷つてある圖としては一寸受取れないのが間々あるのは遺憾である。概念圖に至つてはもう少し實用價值のある様に注意して作つて置いてほしかつた。

特に阿蘇山の概念圖の如きは著者の最も得意とせらるゝ筈のものであらうが不幸にして重要な地名の脱落があり、その上誤謬迄敢えてしてあるのは残念である。口繪寫眞に至つてはむしろ無い方がよかつた様に思ふ要するに本書はいかに所謂朋文堂式の際物らしい體裁に終始してしまつたことは九州の山岳界を指導する位置にある筈の著者のために惜しむと同時に、一般に本書の推稱を多少躊躇せざるを得ない。竹内)

山の寫眞のうつし方

東京朋文堂發行、四六版 二七〇頁、定價一・八〇

山岳寫眞の大家として、夙に令名を馳せた手塚順一郎氏が、二十年來の尊い體驗を基礎として著述されたものである。職業寫眞家として山岳寫眞に志した人は、恐らく手塚氏が最初であつたらう。大正八年頃信濃山岳會から頒賣された、同氏撮影にかゝるカビネ型の素晴らしい山の寫眞は其頃の我々などんなにか感激せしめたことが、未だに忘るゝ事が出来ない。

本書は他の一般寫眞術を説いたものと、プリンシプルに於て何等變つた所はないが、平地とは聊か環境を異にしてある、山の寫眞専門に永年精進して來られた丈に、數多くの經驗を語られてある。そして小六ヶ敷の理屈抜に、解り易く述べられてゐるから、初心者には元より一ぱし名手と自負せらるゝ向きも、熟讀すべきである。書中讀者の質疑に應ずる爲著者に対する質問券を添付してあるが、不幸著者は出版の當日、出来たばかりの本書を抱いて、永眠されたので、不測本書が遺著と成て了つた

譯で、洵に痛恨に堪えない。想ひながら純白クロスに白銀を置いた装頓は、何うみても遺著としか思はれない。巻頭に収められた無慮八〇枚の寫眞は、全部が皆著者會心の作でない迄も、相當自信を以て撰まれたものであらうが、惜い哉製版の粗悪は、平生著者が重きを置かれた氣分の表現など、一として窺ふことが出来ないのは残念である。併し一々撮影の時期、レンズの種類、絞り、露出等を明記してあることは良い参考となる。

(神谷)

山行 (やまゆき) 第一號

福岡縣木屋瀬町筑紫山岳會
七年八月 菊判 一六二頁
定價一・二〇

筑紫山岳會の會報第一號である。内容は「研究と紀行」祖母以東の山と溪谷 加藤數功・等六編「坊ヶツル問題」(大船山貯水池に關する反對陳情及理由書 九州山岳聯盟・九州山地のムタと其の植物 竹内亮・その他三編「雜報」九州の山々を思ふ 三日月直之・以下九編「報告」は昨年十二月より本年三月迄の會員の登山記録を主とす。土鈴」は三段組の漫筆欄であるが、無きにしかず。雜誌の品位を傷けること甚しい。

(伊藤秀五郎)

針葉樹 第六號

東京商科大学一橋山岳部
昭和七年八月發行
定價一圓八十錢

内容は紀文と雜記とに分ち紀文はシルグ・ド・ガバルニ 田中 薫
漂泊に於ける山と人との關聯
春の赤石岳 関山徳三郎
「Vom Leben auf der Alm」

鹿島鎗岳 吉澤 一郎
北信三日の山旅 堀岡 清
北又川入り 吹原不二雄
高見 要

早春の麓 小川 竹夫
「山十夜」 村尾 金二
丸尾 平造
吉澤 一郎
鈴木 英雄

乗鞍を越えて飛騨へ
の五編より成つてゐる。總體に見て何物にも煩はされずに卒直に書かれてある事は一橋山岳部の氣分を現してゐるものであらうがそれだけ未だ若い處がないとは云へない。寫眞は九葉あるが傑作と稱すべきものが一枚もないのが残念だ。(S.T.)

登山術 (黒田正夫著)

菊版二六〇頁 大村書店發行
定價貳圓

近來の快著である。山登りについて書くことは、蓋し、山登りより數倍難しく又遙に大なる忍耐を必要とする。黒田氏の此の近著を手にして著者の努力と熱意とに敬意を表さな

いものは少いであらう。
組立てから見れば著者は全體を十四章に分ち、(一)登山の用意 (二)地圖 (三)天候の豫知 (四)岩攀り

(五)手懸り及足場の利用法 (六)下降 (七)山鶴鳴 (八)綱の取扱方 (九)複合登攀 (十)澤歩きと敷く (十一)棒づり (十二)遭難の原因と實例 (十三)山の再現 (十四)山岳語彙となし、順を逐ふて説明が施されてゐるのであるが、著者の山

一般に對する立場は最初の一章に最もよく出て居り、殆んど讀者をして著者の筆から進み出る公憤や痰呵の多くには誠に同感を禁じ得ないものがある。續く第二第三章の章には著者の蘊蓄が傾けられてゐる。多くの登山の門書にいたく缺けたる部分である丈け重要性が一層あるといふべきであらう。併し第四乃至第九章は

惟ふに、本書の中心をなすものであり、又著者が最も多くヤングに負ふ所のものである。一つ注意深く味ひ讀まるべきである。從而、一掃的な批評を下すことは何人にも許されないが、一讀した感想として述べれば、所謂「平衡登り」が強調せらるゝの餘り、どんな惡場でも鶴鳴のやうにわたれるかの如く響くのは一考に値する。場所柄に相應しからぬ

神谷老人發見の段のいくさりの語り物が介在してゐる點も異様な感を抱かしめる。併し何人も著者の努力には感嘆せざるを得ない程、述叙は微に入り細にわたつてゐる。「棒づり」の章下にも恰も之を以て如何なる傾斜面をも快走しうが如く書かれてゐるが、前の「平衡登り」同様馬が

多少手綱を離れて驅けた感を催さざるを得ない。著者は「自分の信ずることを行つて失敗すればそれだけだ」と云つてゐるが、馬鹿正直者が著者の言葉に従つて失敗しても、なほ且つ「それだけだ」と云ふことは出来ない。

總體的にいへば此の書の長所も短所も著者その人が隨所に恣に姿を現はしてゐる點にある。即ち快著たる所以である。併し登山術の著必しも快著たるを要しない。著者はヤングの名著マウンテン・クラフトを「我々の日本の山仲間」に、日本語で日本語に紹介したい」との發心からして

筆をとつたと語つてゐる。併し著者の「日本流」は著者自身云ふが如く「自分流」なのであつて、此處に一つの論現の飛躍がある。ヤングの著述が我々にとつて無盡蔵の學ぶべきものを包含してゐること争ふべくもない、と同時に之をそのまゝ日本語に現すこと必ずしも必要とも思はれない。殊にヤング一流の含蓄ある文章

必ずしも逐字譯に適するとも考へられない。それ故之の日本化は大いに必要であり歓迎されねばならぬ。換言すれば今著者の「自分流」に再現した謂は「黒田登山術」が最上のものであるかどうかはおのづから別問題であるが、著者の之を企てるに至つた動機については我々も全く同感せざるを得ない。著者流の優なるものを我々が著者の用語に見る。減多矢鱈と異國語を振廻すのは田舎臭くもあるが著者の如く「日本

人の日本の山」なるが故に此處から外國語を一切排斥しやうといふのはファツシヨ的な論現の上の無理がある。のみならず著者の造語「山鶴鳴」「山鶴」の類は口にするにも耳にするにも具合宜敷からず「立派な日本語」とも考へられない。舶來の道具を平氣で使ふやうに、調法なものば舶來のものをそのまゝ使つてもよくはないだらうか。

以上一讀しての謂はば感想にすぎない。本の性質よりして批評を下すとなれば當然詳細に個々の事項についてなされなければならない。併し乍ら何れにしても、屢々繰返せる如く、著者の熱と努力とには全く感嘆せざるを得ざるものがある。そして此の書が將來の此の方面の發展のための一つの有用なる貢獻たることを疑ふことは出来ない。

(序で乍らヤングの手紙の裏につけ加へてある翻譯は餘り著者流である。小さい事柄であるが巻頭である丈に氣になる。改版に際しては改譯さるべきであらう。)

(松方三郎)

原稿・寫眞・募集

「高山深谷」前號發表の如く寫眞帖の發行計劃あり、會員諸氏の秀麗なる山岳寫眞の應募を希望す。

「山岳」第二十七年第三號は十一月發行の豫定に就き、御投稿あり度し。原稿ハ切拾月十五日。



山の消息

福岡縣體育協會主催

第二回登山講習會

福岡縣社會教育課ではかれて社會教育的見地から登山の効果を重視し指導者養成、一般登山思想向上のために一昨年第一回登山講習會を開いて多大の効果を収めたので、今年も同様の主旨で縣體育協會が主催となつて、第二回登山講習會を筑紫の靈峯英彦山で八月廿日廿一日の兩日に亘つて開催した。講師は第一回同様本會々員竹内亮で、第一日は英彦山腹英彦山小學校で一般登山術、山の科學及び北九州の山岳等の講演を行ひ、第二日は英彦山上宮岳、北岳、藥師峠、鷹巢一の岳等を巡登して午後二時すぎ英彦山小學校で閉會を行つた。受講者は中小學校教員、青年團指導者及び一般趣味者等約四十人で頗る熱心に講習を受けられたことは大なる成功であつた。(竹内亮)

福岡山の會成る

福岡市居住の本會々員を中心として一昨年來福岡山岳談話會なる山岳

同好者の親睦機關を設けて居たことは既報の通りであるが、今度一層内容を更整して福岡山の會と命名し愈々山岳研究登山界の指導的に福岡市を中心とせる地方の山岳の研究をモットーとして、愈々本格的に九州の山岳界に活動することになった。その會は毎月一回第一水曜日に例會を開き、毎年一回十月に總會を開く他年一回機關雜誌「福岡山岳」の發行を行ふことになつて居る。猶その會は本會々員竹内亮氏を代表者とし、事務所は當分福岡市中間町四野村方に置くことになつた。

九州の山の消息

九州の山岳界も最近メッキリ面目を改めて少數ではあるが、高い理想の下に先驅者の熱意に燃ゆる眞面目な若い山人達によつて殆んど暗黒であつたと云つても決して過言でなかつた、中部以南の山々の扉が開かれつゝあることは何と云つても愉快な事である。

而してその序幕は實に阿蘇山に於て五高山岳部の人々によつて切つて落された様に思はれる。勿論それには當地の北田正三氏の功績も忘れることは出来ないであらうが、とにかくそれ第の人々の努力によつて阿蘇山は全く面目を一新して近代的の澄冽たる清新さを以て高岳の北尾根、赤がし谷、根子岳等の岩場が登山界に君臨するに至つた。がしかし今では最早それも過去のものとなりつゝあつて、かつてそれ等の岩場に精進

した山人達の興味は漸く祖母山以東の山々に集中されつゝある。その間の消息を最もよく傳ふるものは昨年版された五高山岳部報告第一號であつて、昭和三年に出版された加藤岩崎兩氏の「九州山岳案内」が舊來の九州の登山界の總決算をした劃期的文獻であつた同様に、最近の九州登山界の動向を示す貴重な文獻である。

しかし今その新しい興味の中心である。祖母山以東の深山地帯に最も多くの交渉を有するものは、福岡縣木屋瀬町に本部を置き加藤數功氏に率ひられる筑紫山岳會の人々であつて、所謂祖母山傾の藪尾根大崩山の祝子川溪谷、祖母山の奥嶽川溪谷等の秘境を紹介するに至つた功績は主にその人達の貢ふべき處であらう。

次に九重山嶽は九州本島の最高點を形成する山岳地帯ではあるが、山相飽く迄明瞭、交通亦至便なるため夏山としては可成一般的となるに至つた。しかし九重山嶽の眞價はむしろ冬山にあつて海拔一三〇〇米に位置する法華院温泉の存在に恵まれて四邊の銀嶺にスキーをやる快味は蓋し他に比類を求むべくもない。

一方山人達は九州の最高峯一九三五米の宮ノ浦岳を有する屋久島に異常の注意を拂つて居るが、遺憾乍ら位置餘りに偏在せると交通不便なるためとがたゞつて登山者は今猶寥々たるものである。しかし本島は山岳の規模甚だ壯大を極めしかも登山

路と山小屋とに恵まれて居るので、將來は益々多くの登山者をひきつけるに至るであらうと思はれる。

而して之れ等の登山界の動向を左右する登山團體は前の五高山岳部及び北九州の一角にあつて、氣を吐きつゝある筑紫山岳會の二勢力が主であつて同時に筑紫、戸畑兩山岳會を中心とする九州山岳聯盟の勢力も決して小さなものではない。唯ここに注意すべき傾向はそれ等の有力な團體がすべて九州の中部以北にあることとて、かつて「楠郷山誌」の如き實質ある文獻を世に送つた南九州山岳會は不幸にして今その存在を忘れ果てゝ居るのは遺憾である。(竹内亮)

利根川水長澤

七月十日湯繪會、十一日利根川矢木澤小屋、十二日赤倉澤小屋、十三日雨澤在、十四日水長澤上流、十五日平ヶ岳を経て猫又川水源、十六日尾瀬ヶ原より沼田、翌朝歸京。

水長澤は地圖で見ても判るやうに緩かな明るい谷でした。明治二十七年の探險隊が発見し、隨喜の涙を流したと傳へられる文珠岩は上流二俣の本流、文珠瀧の附近の岩を呼ぶやうであるが、不幸にして、私達の眼には端坐せる文珠菩薩の像とは考へられなかつた。然し文珠瀧附近の岩壁は彼等に非常なる恐怖心を與へた事は領悟する。水源地附近の歩きよい小澤はブッシュもなく、知らぬ間に何時か身は、平ヶ岳頂上の草原に

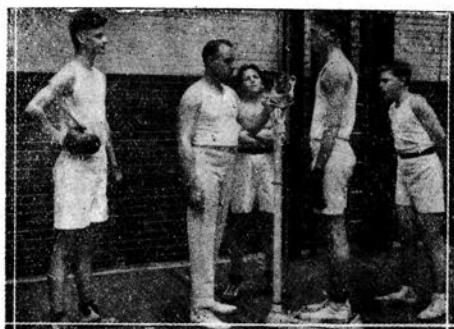
美滿津の「ホームトレーニング」用具！

型錄進呈



合名會社
美滿津
本郷・赤門前

電話
(小石川) 845・2071



運ばれてゐる程、氣持のよいところ
でした。同行萩島四雄、林主税

(角田吉夫)

飯豊山近況

七月中旬飯豊山へ出掛けた時に開
いたことですが、飯豊山彌平四郎口
徳澤驛と眞々澤間二里、乗合自動車
が七月から開通。

彌平四郎口、長坂から三國岳へ取
付くに、今迄一旦御澤へ下つて居た
のを、下らずに長坂から、虎岩山なが
らんで三國岳直下に出る新道を目下
工事中。來年はこれによれる由。

(島田 巽)

早月尾根

冬季ルート探査旁々單獨で劍岳へ
行つて來た。八月九日東大谷を登つ
たが、天候と體の具合不良のため、
早月主稜直下三〇〇米より退却せり
左に其時の見聞二、三を報告す。

1、パンパ島より早月尾根へのルー
トが拓かれた。所要時間八——十
時間日大の廣田氏は約六時間で登
頂せりといふ。

2、案内組合の設立、丸田丈次郎、
酒井竹次郎外約二十名、代表者は
白萩村々長、日當貳圓、冬季割増
未定、本年はパンパ島に人夫詰所
を設けたれど、來年度より下流伊
折或は村役場附近へ移轉する由。
3、立山水電取入口上手に目下登山
小舎新築中、今秋落成の豫定。

(吉田喜久治)

千枚尾根より赤石岳へ

七月十六日新倉發二軒小舎より千
枚尾根に登り、千枚、東岳、荒川岳
を経て赤石に登り横島に下山、只今
又新倉に歸り候。千枚尾根は、地圖
には明記なけれ共、立派に踏跡あり
道も案外良好に御座候。唯此道にて
注意すべきは、千枚の頂上迄登らず
に、這松帯の下にて大崩の上部を横
こへつゝ、千枚小舎に出る事に有之
候。尙御報告申上度きは、千枚小舎
は大破使用に不堪、赤石の富士見小
舎も同様なり。之は山日記に其旨記
載の必要ありとも存候。次に荒川小
舎は二、三日中に番人が登つて來る
由、又赤石小舎は改築して完全し、
本年より番人を置く事になり、既に
去る廿日上り八月一杯は居るとの事
に候。本年も雨のため荒川小舎に一
日滞在し煙になやまれ閉口致候。
山小舎の煙に對する施設、何とか御
研究になつては如何。

於甲州新倉 中根經三

北アルプス總行脚

七月二十日出發大町より四ツ谷に
到り、白馬尻一泊、大雪溪を描く。
頂上の小屋に四泊して寫生に送る、
それより鏈、不歸、唐松を経て小屋
に一泊、八方尾根より細野に降る。

七月二十八日大町より大出を経て
龍川を廻り、大澤小屋に泊る。針ノ
木の雪溪を描く、峠の小屋に滞在し
て蓮華、針ノ木峠に登り、晴れたる
山嶺を描き、十數枚の油繪を製作歸
京す。

(笑木猪之吉)

美津濃の登山靴とリックサック



山行に最も大切な完全無缺の
アマハーモデルの登山靴やキ
スリングモデルリックサック
等常に豊富に取揃へてござい
ます。

登山靴 ¥10.00..... ¥22.00 リックサック ¥3.50..... ¥11.50

登山靴とリックサックの御注文御受け致します

精撰せる原料一切を取揃へてございます型色共御希望通り御製作致し
ます。

神 田 小川町

美 津 濃

電(神田) 3570 3572
3571 3573

高瀬入り北鎌登攀

久瀧く高い山へ行かなかつたのでトレッキングの積りで、七月廿六日より三日間、白馬岳で充分山の気分を味ひ、體の調子を整へ、雪溪のグリーセードや撮影を楽しみたる後、高瀬川に入り、炎天に苦しみつゝも、恵まれたる快晴を祝福して湯股温泉に宿泊。廿日千丈——天上出合から北鎌尾根第一——第二ピークの鞍部に登り、尾根通し廿一日午後六時半槍ヶ岳頂上に辿り着く。八月一日より三日間、槍の肩に暮營して、大槍小槍、孫槍とロック、クライミングの練習をし、思ふ存分岩肌に觸るゝ事が出来ました。

千丈——天上出合より約一丁上左岸に岩小屋あり、五、六人は收容出来具合よく出来てゐます。

北鎌第一——第二ピーク鞍部取付場所は、昨年竹村多門次氏が、大町の人夫を入れて途中迄木を伐らせた由この入口に木を削り多門次新道と書いてあります。この新道入口より約卅分で岩小屋あり、細長いものです。三人は收容出来ません。

右の外、一四二六米獨標下ピーク東下にも岩小屋あり、二、三人は收容出来ません。(龜山雄四郎)

穂高の岩場

去月二十日ばかりの山旅を終へて今淺間の高原に居ります。

槍、穂高の岩場は何時も變らぬ、魅力あるものでした。其間前穂高より岳川、瀧の澤を下降致しました。

上部は比較的急峻に雪溪、下部に於ては素晴らしい柱狀節理の岩の連續にて、スノーブリツヂの下を滑るなど相當困難しました。夏季比較的殘雪跡き岳川側に於ては、この澤は登路として興味あるものと思ひます。

八月六日

(島田武時)

青安口より白峰へ

七月廿三日から南アルプス白峰三山へ登りました。コースは青安口——池山釣尾根——三山——大門澤——西山温泉です。

青安には驚く住山直下の吊橋が昨年の秋から破損して通行出来ません。已むなく鮎差で渡渉し、南岸の踏跡を辿つて吊橋の南側に出了ました。此途中ロープを要する所が二ヶ所ありました。(約二時間を要す) 此外に吊橋の下を渡渉する方法及破損箇所の針金を傳はる方法もありますが兩者とも危険ですから、結局始めから南岸を行くのが最も安全と思はれます。吊橋の破損は林道の關係で、山梨縣廳で修繕する事になつて居るが(道路の修繕費に約壹千圓を要する由)財源難の爲思ふ様にならぬそうです。池山の釣尾根道は時間的に早く北岳に取付き得るコースで今後利用者も相當ある事と思ひますから、一日も早く復舊されん事を希望します。當池山の御池には今冬積雪が少かつた爲か、オタマチヤクシがうようよして居る程で、水はあつても飲用に供し得る水は一滴もなく、北岳小屋迄水不足の爲閉口しました。

七月三十日

(小島一祐)

木曾御岳より北アルプスへ

連日の好晴に恵まれつゝ去る十四日以来、木曾の御岳を振り出しに、岳の湯より田部先生の名文通り、御岳と乗鞍の幽境、益田川沿岸の靜寂境阿多野より乗鞍に登り平湯に下山蒲田より笠ヶ岳に登り、双六ノ池より更に三俣蓮華、黒部五郎、藥師に登りました。更にスゴいより五色ヶ原に到り、平より南澤を越へて、烏帽子に登り、濁り湯俣に下り、燕より中房に下山す、この行程前後十八日間を要しました。

七月卅一日

中房にて(増井一彦)

八海山より

七月廿四日素晴らしい快晴に恵まれて、宿望の八海山に登りました。全山樹木に乏しく、山に深みのないのを憾みとしますが、奇峰天に沖して物凄く、一寸兩神山に彷彿してゐますが、山頂の眺望は實に雄大を極め近くは駒、中ノ岳の雄容、水無川を距て、聳立し、遠く飯豊山、守門山彌彦、佐渡の山々及び妙高、北アルプス、魚野、信濃兩大河の巒々たる銀帶等々、洵に素晴らしい大觀でした。他は何れ歸京の上申上します。

七月廿五日

(安田登茂次)

編輯後記

八月會報を休だ爲に原稿は多數に集り、次號に廻したものが尠くない

會の仕事も一つ一つ着々と進み、先ず圖書の整理が完成した。近く目錄の發行も出来る事と思ふ。秋の計劃には寫眞集高山深谷、山岳二十七年三號の發行がある。寫眞及び原稿の御送付を願ひ度い。穂高瀧澤の山小屋建設の準備も秋より冬にかけての一つの仕事である。

藤嶋理事は七月十一日秋田日本銀行に轉任された。庶務は田中理事が引繼いだれども、圖書室は一寸淋しくなつた。

(角田)

昭和七年九月廿三日印刷
昭和七年九月廿四日發行

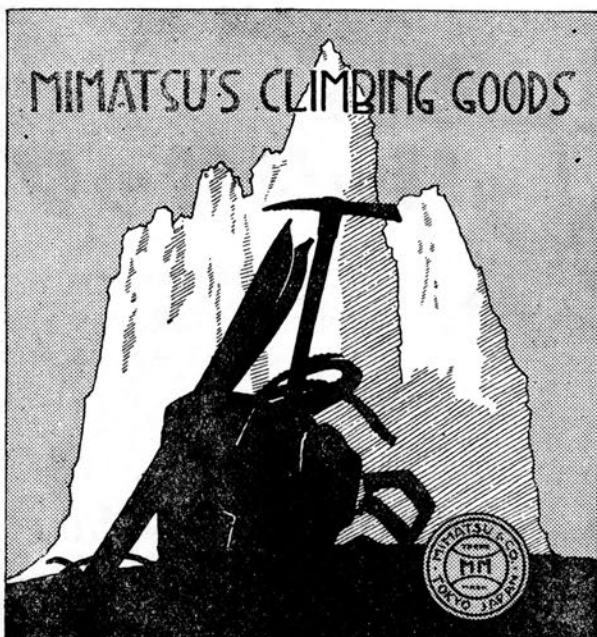
發行所

東京市芝區東本町一
不二ビル

發行所

日本山岳會
會報編輯所

(所刷印空明開)



MIMATSU'S CLIMBING GOODS

夏と冬の登山用具全般
クレ・ポライ及びスキー用品

合名會社 美満津 東京・本郷